8p 二段 30×24 左右~~表ケイ~~2本 ホリーダ
見出段抜 10行

③

新潮三月号

P.25
|
P.29

カット

小説の不安定

伊藤整

フロオベエルは「感情教育」「ブヴァアルとペキュシェ」を書いてゐる内部から、低俗な人間を描かねばならない小説作家の仕事の厭らしさに堪へられなんだが、

物語りとしての発想法においては小説は低い面から人間を把握するものであるから、その形式の踏襲者フロオベエルが辿った運命は当然のことであった。彼が近代の低俗さと小説との結びつきを回避して「聖アントワヌの誘惑」と「サランボオ」を書いたのは、高きエゴの叙事詩的世界を求めたので、ゴオゴリが「タラス・ブウリバ」を書いた衝動と同じであり、プウシュキンとして、ロシアは何という悲しい国だろうと言はせた死せる魂を説かせた衝動、トルストイをして自己の全生活を露しき仕事であると言はせた衝動であって、それは低部からの実体的把握という小説の方法の犠牲である。

小説の藝術性の不安定は、それが一應の定着を見た時、つまりフロオベエル、ゴオゴリ、トルストイの線、十九世紀から延って来たると思はれる。物語りの傳統においては、技術のかげに作者が姿を消すということ、作者の主体的エゴの不在性が要求され、叙事詩的な傳統においては自傳的性格が超越者として顔を現はして来る。~~新小説はその両方の要素の結合において成立~~